

# J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その7） —碓氷峠から東京へ—および付録

山田 直利<sup>1)</sup>・矢島 道子<sup>2)</sup>

## 【訳者まえがき】

本邦訳は J. J. Rein (1880) の「中山道旅行記」(独文)を全訳し、それを(その1)～(その7)の7篇に分けて掲載するものである。原論文は「章・節」のほかには見出し語がなく、段落間の文章も長いので、邦訳では新たに見出し語を設け、またなるべく短く段落を入れた。原論文の脚注は、邦訳では原注として各章・節の末尾にまとめて配置した。訳者による注は訳文中の括弧〔 〕内に記入したほか、別に訳注を設けて原注の次に配置した。さらに原論文・原注・訳注に引用された文献のリストを章・節ごとに載せた。原論文には多数の植物の学名が載っているが、邦訳ではすべて原文のまま使用した。

なお、本篇は「中山道旅行記」邦訳の最終篇に当たるので、原論文の付録3点(下記)の邦訳を載せた。最後に、本邦訳全体についての正誤表を付けた。

付録Ⅰ：中山道の路線測量に関する覚書

付録Ⅱ：中山道各宿駅間の距離

付録Ⅲ：E. クニッピン氏により中山道で測定された  
標高一覧表

付録Ⅳ：J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳 正誤表

## 2. J.J. ライン著「中山道旅行記—著者自身の観察と研究に基づき、E. クニッピン氏の路線測量に従い、その覚書を利用した—」全訳(つづき)

### 2.5 碓氷峠から東京へ(原論文の第IV章)(第13回)

#### <関東あるいは吾妻国>

標高 1,235 m の碓氷峠<sup>うすいとうげ</sup>には、この峠にふさわしい碑文の記された柱が立っていて、信州(信濃)と上州(上野)<sup>じょうしゅう こうづけ</sup>の国境を示している。峠を越えると、我々は日本の三大河<sup>さんだいか</sup>の3番目である利根川<sup>1)</sup>の流域に入り、そしてさらに半日の旅行の後に、利根川によってうろおされた関東(原文では Kuwanto)あるいは吾妻国<sup>あづまのくに</sup>の平野に到着する。関東あるいは吾妻国という2つの言い方には説明が要る。

私が関東(カントと発音)平野と呼ぶ地域は、利根川、隅田川〔荒川〕およびこれらの支流によってうろおされており、江戸湾〔東京湾〕から日光山地まで、そして利根川の左分流が太平洋に注ぐところ〔銚子〕から碓氷峠まで、それぞれの方向に約 30 里広がっている<sup>1)</sup>。それは、かつて大部分海におおわれていたが、土地の緩慢な上昇、河川堆積物および火山灰層によって次第に今日のような姿を獲得し、そのうち、日本民族の勤勉さによって、荒野から、庭園のようによく耕作された多数の町や村を持つ地域に移行した。8つの国々(武蔵、相模、安房、上総、下総、常陸、下野および上野)が、面積の大小はあるにせよ、関東平野を構成している。それらは、秀吉が家康に世襲の封土として与えた 16 世紀末から、徳川の大黒柱となった。

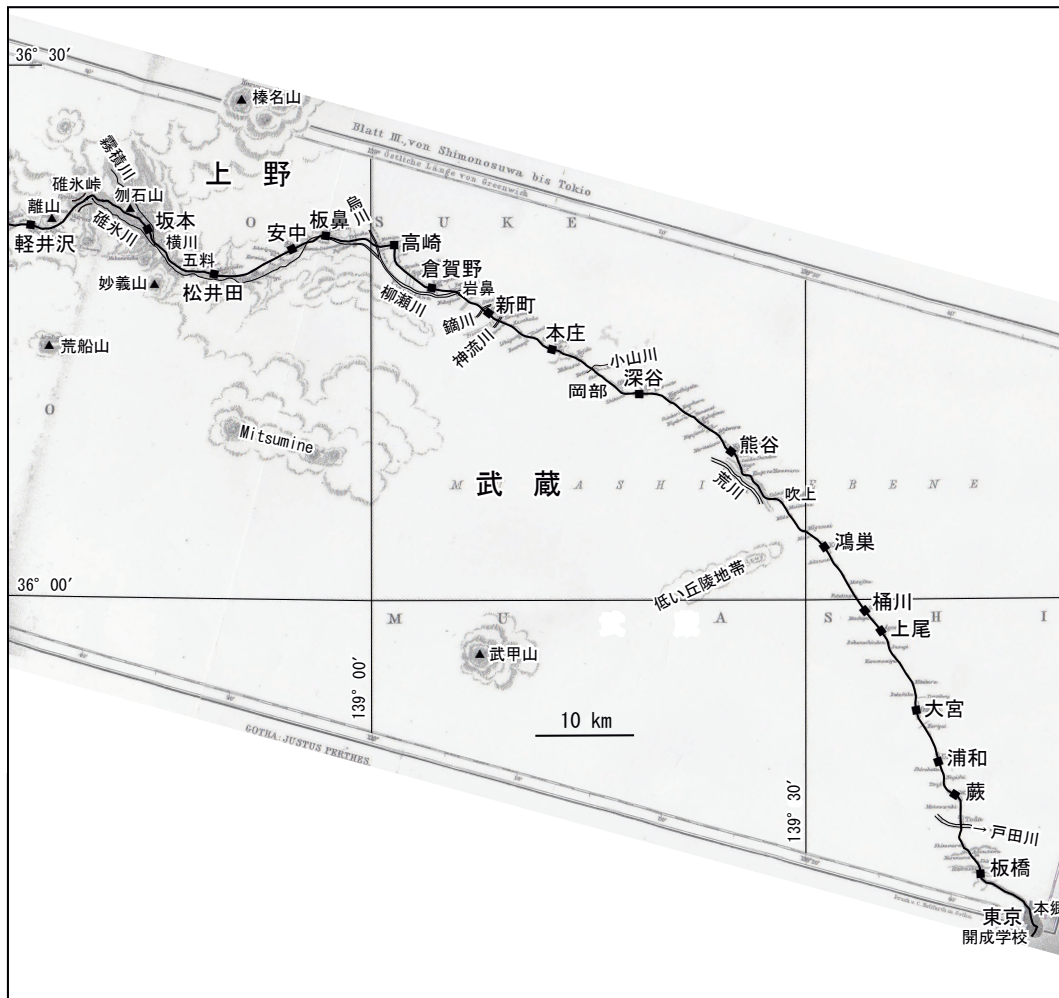
これらの国々および首都江戸への出入りは、この時代の将軍によって嚴重に監視され、そのために、諸街道をこの大きな平野へ導き入れる周辺山地のすべての峠は大きな意味を持っていた。そのようにして、箱根峠、小仏峠(原文では Kobotoke)、碓氷峠、三国峠、山王峠<sup>2)</sup>が、それぞれ、東海道、甲州街道、中山道、越後街道(新潟への道)、会津街道および奥州街道に対して、重要な出入り口(戸)となった。とくに厳しかったのが、東の出入り口(京都から見て)の箱根峠すなわち関東への出入りであった。なぜなら、これを通して京都やすべての西南諸国との主要交通が行われていたからである。それゆえ、かの8つの国々は、まさに東の出入り口に当たる8つの国々の意味で、関東あるいは関東八州〔関八州〕と呼ばれていた。

吾妻国の名称、すなわち「吾が妻の国」<sup>2)</sup>は非常に古く、以下の起原を持っている。大和武尊(やまとたけるのみこと)(原文では Yamato Dake)(武人王)という名の、日本の古い伝説的歴史においてもっとも尊敬される英雄は、西暦 110 年〔山田・矢島、2017a の訳注 \*1 参照〕に父景行天皇から関東地方の原住民(蝦夷)を屈服させよという命令を受けた。この任務を遂行する中で、彼は、江戸湾を越えて対岸に達するために、今日の相模半島〔三浦半島〕の浦賀の近くを、彼の軍勢とともに、そして彼の妻、橘姫

1) 地質調査所(現 産業技術総合研究所 地質調査総合センター)元所属

2) 日本大学文理学部

キーワード：ライン、クニッピン、中山道、例幣使街道、地理、地質、武蔵、上野、碓氷峠、関東平野、利根川、隅田川、坂本、高崎、熊谷



第 13 図 中山道路線図 7 (碓氷峠—東京)。

Rein (1880) の付図 III 「25 万分の 1 中山道旅行路線図—下諏訪から東京まで—」の東半部を基図とし、その上に中山道六十九次の宿駅名をやや大きな字で、その他の地名をやや小さな字で和名表記した。

なお、本図左側の“Mitsumine”と表記されたところは、西御荷鉾山(標高 1,287 m)および東御荷鉾山(標高 1,246 m)からなる御荷鉾山の山稜に相当する。クニッピングはこの山稜に本図より南方の奥秩父三峰山の名を間違っ使用した可能性がある。

を伴って、渡航した。その時怒った海神は海を揺るがし、そして橘姫は、海を鎮め彼の企てを助けるために、自ら犠牲となり、大波に身を投げる決心をした。彼女は目的を達成し、大和武尊と彼の従者は陸地に到着して、その地を征服した。

数年後に大和武尊は、中山道一当時まだ存在していなかった一地域を通して西南の地へ帰還した。今日でもなお苦勞の旅である関東から碓氷峠への登りは、当時さらに多くの苦しみを伴った。我らの英雄がこれに耐え、彼の眼差しを峠から今一度関東平野および遠い背景の蒼い海に振り向けたときに、彼は橘姫の思い出にふけりながら、悲しみを籠めて呼んだ：「吾妻！吾妻！」(我が妻！我が妻！)。これが、関東の地域が吾妻国と呼ばれる根拠である<sup>3</sup>。

### <碓氷峠から坂本へ>

碓氷峠から<sup>はねいしやま</sup> 笏石山〔標高約 800 m〕の下を通過して坂本へ達するまでの道は約 2 里の距離があり、とくに、一部に柱状節理が発達する淡灰色のドレライト質岩石<sup>4</sup>を越えて行く 2 番目の区間で、非常に険しい。この道はほとんどつねに灌木林の中を通り、とくに夏季の前半に、色とりどりに混じった植物の中でたえず新しい色彩や花・葉の形を目にするときには、苦勞と共に多くの楽しみを与えてくれる。おおよそ半分位下りてきたところには、見晴しのよい場所にあつて休息を勧める笏石の茶店がある。ここから下方には、碓氷川の流が街道の右側を曲流して狭い峡谷の出口に出たところに美しくたゞむ坂本の宿駅を望むことができる。

この村には、険しくそびえる山の麓の標高 480 m のあたりに、無類の長く真直ぐな街道が作られている。街道と平行に流れる碓氷川の谷はまるで絵のように美しい。坂本を過ぎて間もなく中山道は、碓氷峠の北方に源を発し狭い谷を通過して剗石山の左を流れる幅約 12 m の小川〔霧積川〕<sup>きりづみがわ</sup>を渡り、それから長い時間、川の左側（原文では右側）を行く。碓氷川は峠の南方から流れ下る支流〔入山川〕と横川の上流で合流し、ここからはすでに大きな川となり、街道の右側を勢いよくそしてかなり深く河水を流し続ける。

### <妙義山>

坂本宿と次の松井田宿との中間の<sup>ごりょうむら</sup>五料村〔現安中市松井田町五料〕の向かい側には妙義山がある。それはある意味で私が知っている日本の最も注目すべき山である。この山は、おそらく〔剗石山付近と〕同様にドレライト〔実際には安山岩〕からなり、かの幻想的で廃墟のような岩石構成を示し、それは山全体の特徴であり、すでに触れたことがある〔Rein, 1875〕。それはカナリア諸島（Canaren）の壁のように聳えるフォノライト岩脈を思い出させるものであり<sup>5</sup>、壮大な森林地帯の中では非常に絵画的であり、大多数の日本の山が穏やかな形を示すのに対して少なからず驚異的である。

### <松井田・安中・板鼻>

松井田には標高 300 m で最初の竹林が見られ、それ以後、蓑を着ている人を見かけなくなる〔山国ではなくなるという意味か〕。竹林は平野の植物相であり、それは国の首都に近付けば近付くほど頻繁に見られるようになる。街道は次第に低地へ移り、丘陵は街道の両側に退き、そして、<sup>あんなか</sup>安中に着く前に、ちょうど北方に位置する榛名山の裸地の〔溶岩〕ドームを眺めることができる。これはとくに原〔旧原市村、現安中市原市〕の手前でよく見られ、我々はそこから心地よい街道を、日光のもっとずっと大規模な杉並木を思い出させるスギ（*Cryptomeria japonica*）の美しい並木道を通して、間もなく小都市安中に到着する。ここは以前に大名板倉が居住していた。

「ますます豊かになって行く平野を通る心地よい街道は碓氷川に沿い、そして安中を後にしては碓氷川北岸の急な、しかし低い岸辺に接近して続くようになり、そのため、人々はまもなく川の右岸へ渡らねばならず、ここから板鼻のすぐ手前まで短時間右岸を行くことになる。もう一度碓氷川を渡るときには<sup>ふなはし</sup>船橋が用いられる。」（クニッピンゲ）。

<sup>いたはな</sup>板鼻宿と高崎宿の間の真ん中には、豊岡村〔現安中市上

豊岡町〕への入り口の茶店の向かいに神社〔浅間神社〕があり、とくにその前に立派な樹木があるために注意を引く。それはケヤキ（*Zelkova acuminata*, Planch.）で、中山道のどこにも見られないような異常な大きさである。

### <高崎>

上州（上野）国の首府である高崎は、日本のもっとも重要な生糸地帯の真ん中にあり、碓氷峠から東へ 9 里、東京から北西へ 27 里の位置にある。ここで中山道から北方に三国峠および新潟へ向かう越後街道が分岐する。

碓氷川は首府の南西部で、北西から流れる烏川に合流し、烏川はそれから柳瀬川に名を変えて南方へ弧を描き、中山道の岩鼻（現高崎市岩鼻町；原文では Itahana）で再び街道と一緒にになり、渡し船でそれを渡り、さらに東方では<sup>かなながわ</sup>神流川（原文では Kanagawa）を受け入れ、それから<sup>ごりょう</sup>五料〔現佐波郡玉村町五料〕で利根川に注ぐ。

高崎の南側には、以前大名松平右京亮〔<sup>うきょうのすけ てるあき</sup>輝聲〕（8 万 2 千石）の居城であった広大な城がある。

この街には約 2 万 5 千人の住民がおり、その恵まれた位置のために、裕福な地域の交通中心地として活発な交通を享受している。夏季の最初の月には養蚕がいたるところで最大の関心と呼ぶ。日本の慣用語がいうように、注意と忍耐により幼虫の助けを借りてクワの葉を高価な生糸に変えるために、いたるところで丹念な手が働く。生糸、とくに高崎の数里北の前橋（原文では Maibashi）の周辺に産するものは、日本でもっとも高価である。この地のクワは、平地では一般的であるように、平行に植えられ、幹のない低い灌木をなし、おそらく我が国〔ドイツ〕のぶどう園のブドウのようである。

私の同伴者や私のように、暑い夏の夜に高崎へ疲れてやって来る旅行者は、ここで待ち焦がれた休息をほとんどとることができない。宿屋での暑気は夜でも非常に蒸し暑く、街道の喧騒と人の往来は終わることがない。多くの旅館から聞こえてくる芸者（歌手および踊り手）の三味線演奏や鼻歌は、日暮れから深夜までの街道で、氷売りの氷！氷！氷！の呼び声や按摩さんの笛と混ざり合う。按摩さんまたは洗髪人は、坊さんのように頭をつるつるに剃った盲人であり、長い竹の棒で道を探り歩き、そして街道に彼がいることを横笛を吹いて知らせる。彼を必要とする者は、彼を呼び寄せ、風邪や痛風などを治すために彼に体を伸ばさせ、揉ませる。これによって日本の盲人は生計を立てており、それはセベリアやその他のスペインの都市の盲人が一部は新聞配達によって生計を立てているのと同様である。

高崎から東京への道は、今日では郵便馬車を使って普通 12～13 時間の旅行によって行くことができる。この区間では馬は 7 回も交替し、郵便袋は少なくとも 12 回交換される。なぜなら、郵便馬車は多くの都市や村を通過しており、そして日本はよく組織された郵便制度を持っているからである。実際、外国との交流が再開されるより前に、この国は郵便制度をすでに長い間持っていたのである。

### <倉賀野一本庄>

すでに述べたように、中山道は高崎から約 2.5 里の岩鼻で烏川(柳瀬川)を渡る。これより前にすでに、倉賀野宿を過ぎて間もなく、この川はその右側で西方から流れるかぶらがわ 鐮川<sup>3)</sup>を受け入れている。鐮川沿いにはフランス式の有力な製糸業によって知られた富岡がある。我々が新町を過ぎて渡った神流川(原文では Kanagawa または Hanagawa)の広い河床はチャートや花崗岩の礫でおおわれ、真夏にはほとんど渇き切っている。ここに一番近い、注目すべきところは本庄の町である。

例幣使街道はここで中山道から離れ<sup>6)</sup>、利根川を渡り、そして北東の方向に、東京から 36 里北方に位置する日光、すなわち徳川家の初代および第 3 代将軍(家康および家光)の有名な神苑と墓地〔日光東照宮〕に向かって続いている。王政復古(1868 年)以前には、この街道は夏季の期間南方からの巡礼者によって非常に賑わった。日光を日本全体の最も見るべき価値のある地域とするために、自然と芸術が日光で結びついた。外国からの訪問者も日本の言い伝え：「日光を見ないうちは結構と言うな」(日光を知らずして美を語るなかれ)が尤も<sup>もつと</sup>であることを知る<sup>4)</sup>。本庄から日光への上記の街道は帝の使者(例幣使)という名前を持っていた。例幣使すなわち高位の公家<sup>くげ</sup>は、かつては例年京都から中山道に沿って本庄まで、そしてそれから日光に向かって旅行し、ここで高名な君主の神社〔日光東照宮〕に人間神化の印し(金箔で飾られた紙の幣串<sup>へいぐし</sup>：いわゆる御幣<sup>ごへい</sup>)を奉納した。

本庄の南には武甲山<sup>ぶこうざん</sup>(原文では Bukkosan)が見える。それは平野に大きく突き出た標高約 1,400 m の山頂であり、東京からもしばしば見ることができる。

### <深谷—熊谷>

中山道は、本庄と小都市岡部の間で利根川の最後の支流〔小山川〕を渡って後、隅田川〔荒川〕流域へ入る。岡部の後には間もなく同じように立派な宿駅、深谷が続く。ここでは以前、ある旗本<sup>5)</sup>が将軍の名で居住していた。それからさらに 2.75 里の後に、我々は荒川(隅田川)の左岸

に近い都市、熊谷に到着する。この都市は何年もの間その名前で呼ばれた県(熊谷県)の県庁所在地であり、一方、高崎はその点では(群馬郡の)郡長所在地に過ぎなかった。1876 年の行政機構の変化〔第 2 次府県統合〕以降、局面は一変し、高崎は大きな部局である群馬県の知事(県令)を持つに至った。群馬県には熊谷も属し、同県は生糸の供給者として首位に位している。

熊谷の近くまで来ると、中山道には最後の丘陵と共に養蚕業も見られなくなる。土地はいまや全く平坦であるが、起伏の単調さは好ましい形で中断され、いたるところで我々の目の前に現れる立派な耕作地の光景によって和らげられる。高さはしばしば 15 m から 20 m、周囲 40～50 cm に達する竹、老いた奇妙なマツおよび広葉樹からなる小さな杜<sup>もり</sup>が、景観の中のあちこちに現われ、それが頻繁になればなるほど、我々はそれだけ首都に近付いている。これらの杜はしばしばより大きな村落につながるが、しばしばこれだけでも現われ、そしてこれらに囲まれる神社からは家々の屋根のどの部分もほとんど見ることはできない。

舗装され、マツの陰になった道が街道の右や左へ分かれて行くが、それはつねにそのような神社へと続く。そして我々は、我々が通り抜ける村の家並みが緑色の竹や色とりどりの提灯で飾られ、子供や大人が晴着を着ているのを見て、これは近在の偶像の例祭に当たり、我が国の教会献堂祭(Kirchweihe)と同様のものと見なすことができるが、ここでは、主役を演ずるのが踊りではなく、仮面をかぶり無言で行う劇であることだけが異なっている。

### <鴻巣—東京>

我々は郵便馬車に乗って熊谷から荒川左岸のもっとも近い宿駅(吹上)へ急行し、それからさらに東方へと向かい、そして鴻巣、上尾、大宮および蕨を過ぎて戸田に到着し、小舟で戸田川〔荒川〕を渡り、それから我々は小さな原の上に上って板橋へ着く。戸田でその名前を変える荒川は、間もなくほかの場所では隅田川と呼ばれるようになり、そして最後は東京の下流部で大川(大きな川；原文では Ogawa)として江戸湾に注ぎ、水量の豊かさと流路の長さに従って近傍の川〔江戸川か?〕と比較される。しかし、我々はそれを何と名づけるべきか? 河口で呼ばれている大川か、その名前によって東京の狭い東部地区を旧市街から分ける隅田川か、戸田川あるいは荒川か? それは隅田川としてもっとも大きな意義を持つので、私はこの名前に決めている。

板橋は東京の北西の城外の町である。我々がそこからさらに 2 里行けば、我々は広大な首都の中心部におり、そ

して日本橋で富士山を眺め、またそこに中山道の終点を認めるのである。

## 原注

- 1) 詳細は、ラインのドイツ東アジア博物学民族学協会報告第6巻（1874）の論文「日本における自然科学的研究旅行」〔Rein, 1874〕および何よりもペーターマン地理学報告（1879年）のナウマンの立派な論文「江戸平野について」〔Naumann, 1879〕を見よ。
- 2) Adzuma von Waga=私自身の, tsuma=妻
- 3) 略図〔第13図〕はここで残念な誤りを冒している。同図では、鑄川がそれよりも先で烏川に合流し、新町の手前で終わっている。
- 4) 日光に関する詳細な情報は、ラインのドイツ東アジア博物学民族学協会報告第6巻（1874）の論文「日本における自然科学的研究旅行」〔Rein, 1874〕およびサトウの「日光案内」〔Satow, 1875〕に発表されている。
- 5) 旗本階級は封建制度において大名の階級に次ぐものであった。彼らはすべて将軍の家臣であり、そのためその他の諸侯の侍よりもより高い地位にあった。

## 訳注

- \*1 利根川は、幹川流路延長では日本の第2位、流域面積では日本の第1位なので、それを第3位としたラインの記述は誤りである（山田・矢島, 2018cの訳注\*1参照）。
- \*2 ここには奥州街道の峠の名前が抜けている。それは白河市白坂の「境の明神」と呼ばれる標高約400 mのなだらかな峠である（五街道ウォーク・八木, 2018）。
- \*3 「吾妻国」という名称の由来に関するこの文章は『日本書記』の説話に基づいている（児玉, 1986）。
- \*4 碓氷峠から剱石山へかけての中山道沿いに分布するのは前～中期更新世の鼻曲<sup>はなまがり</sup>火山岩類の安山岩溶岩・同火砕岩（中野ほか, 1989）であり、ドレライト（粗粒玄武岩）とよぶのは適当ではなかった。
- \*5 ラインは妙義山をカナリア諸島の火山と比較したが、妙義山は中新世後期の安山岩が著しい差別浸食作用を受けて突出した岩峰となったものであり、現在では火山とはされていない（新井, 1996）。
- \*6 ラインは本庄で中山道から例幣使街道が分かると述べているが、これは誤りで、例幣使街道はそれより手前の倉賀野宿で中山道から分かれ、今市に至る（児玉, 1986）。

## 文 献（付録Ⅰ～Ⅳに関連する文献を含む）

新井房夫（1996）妙義山。地学団体研究会編『新版地学事典』, 平凡社, 東京, 1289。  
 児玉幸多（1986）中山道を歩く。中央公論社, 東京, 434p。

五街道ウォーク・八木牧夫（2014a）ちゃんと歩ける中山道六十九次（東篇）。山と溪谷社, 東京, 159p。  
 五街道ウォーク・八木牧夫（2014b）ちゃんと歩ける中山道六十九次（西篇）。山と溪谷社, 東京, 159p。  
 五街道ウォーク・八木牧夫（2018）ちゃんと歩ける日光街道 奥州街道。山と溪谷社, 東京, 151p。  
 中野 俊・竹内圭史・加藤碩一・酒井 彰・濱崎聡志・広島俊男・駒澤正夫（1989）20万分の1地質図幅「長野」。地質調査所。  
 Naumann, E.（1879）Über die Ebene von Yedo. Eine geographisch-geologische Studie. *Petermann's Mitteilungen*, 4, 121-135。  
 Rein, J. J.（1874）Naturwissenschaftliche Reisestudien in Japan. *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasien*, 6, 60-61。  
 Rein, J. J.（1875）Dr. J. Rein's Reise in Nippon, 1874. *Petermann's Mitteilungen*, 21, 214-222。  
 Satow, E. M.（1875）*A Guide Book to Nikko*. The "Japan Mail" Office, Yokohama, 42p。  
 菅井靖雄（2001）中山道用語集。図説, 中山道歴史散歩。新人物往来社, 東京, 66-72。  
 田島 稔編（1983）測量用語事典。山海堂, 東京, 326p。  
 山田直利・矢島道子（2017a）J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その1）。GSJ地質ニュース, 6, 195-201。  
 山田直利・矢島道子（2017b）J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その2）—京都から美濃境まで—。GSJ地質ニュース, 6, 303-312。  
 山田直利・矢島道子（2018a）J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その3）—美濃を横切る—。GSJ地質ニュース, 7, 80-85。  
 山田直利・矢島道子（2018b）J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その4）—馬籠峠から鳥居峠まで—。GSJ地質ニュース, 7, 131-139。  
 山田直利・矢島道子（2018c）J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その5）—信濃を横切る（2）鳥居峠から和田峠まで—。GSJ地質ニュース, 7, 199-205。

## 付録 I. 中山道の路線測量に関する覚書

### E. クニッピング

路線測量の際にもっとも重要な装置は疑いなく大型のコンパス<sup>\*1</sup>であり、これを用いて景観の中の遠くの山頂やそのほかの突出した地点を交会法<sup>\*2</sup>によって測定することができる。すべての略図<sup>\*3</sup>の精度はこの測定結果に依存している。

通常の方角コンパスの場合、フリーハンドによる測定は、読み取りの前に磁針を押さえねばならず、それによって磁針はつねにいくらかずらされるという、大きな難点があるので、約1°の精度を保つためには2回(しばしば3回)の繰り返し測定が絶対に必要となる。

プリズムコンパスの場合には、視準と同時に磁針の位置を読み取るので、この難点が除かれる。しかし、つねに勧められるように、よい機会に恵まれてより多くの測定をしようと思えば、読んだ値を記入するために少なくとも2回の観測ごとに装置を止めることを強いらられる。それからすぐ次の観測に際して磁針をふたたび停止する前に、自らブレーキの使用によって多くの時間を失い、その結果、最後の測定を省くようになり、それは後に略図の作成時に非常に悔やまれる結果となる。

それ故に、軽量の三脚雲台(尖った先端の付いた脚ではないので、それに合うような軟らかい地面がしばしば見つからない)は、多数の迅速で信頼しうる測定に関して絶対に必要な物である。コンパスはネジで固定されるのではなく、その大きさに対応した雲台の小さな頂部台面上に置かれ、測定の後にはふたたび袋の中に収められるので、それ自身は1回の使用では軽い損傷も受けない。数回の使用の際には、雲台の助けにより5分間に5回もの確かな測定をすることができるので、それ故、〔雲台は〕方位コンパスの重要な測定の際にはしばしば用いられる。

略図の見積もり高度は多くの場合四分儀高度測定によって得られた。小さくて便利なこの測量器具は京都で製作され、0.5°まで正確に読み取ることが許され、フリーハンドで操作される。それは約1デシセンチメートル〔1デシメートルの間違いか?〕の長さの半径を持つ、目盛の中心点から垂れ下がった先の尖った金属の振り子であり、それは目盛に沿って動き、90°の半径をもって伸長管付きの視準小管に平行である。山や太陽の高度決定のためにはこれが非常に有効であり、そのうち後者〔太陽の高度決定〕が正確な方位の決定に役立ち、その際に視準管の影を板紙上に記入する。振幅の測定のための機会は、山勝ちの地方ではまれである。これに反して、方位決定に適している低い太陽

高度は、晴れた日にはいつでも四分儀によって測定することができる。

付図 I〔中山道路線図—大津から加納まで—〕では、摺針峠〔彦根市〕から、琵琶湖の島の1つである竹生島(原文では Tsukubushima) への方向およびその近くの岬〔長浜市葛籠尾崎〕への方向が決定された。私は両者の間の距離を日本の地図から引用し、それから大津、比良山(原文では Hiranoyama)、竹生島、上記の岬および沖島間の湖岸線を内挿した。同じように、神ヶ嶽〔御在所山〕および鶴沼峠〔各務原市〕に関連して尾張湾が書き込まれた。

略図〔付図 I〕西部の標高は赤坂において京都(42 m)と池尻〔大垣市池尻町〕(15 m)の間で内挿された。後者の標高はもちろん見積値に過ぎないが、おそらく真実から余り大きく隔たっていないであろう。遠く離れた観測地点の気圧計の示度を考慮して計算された非常に低い標高は、海水面高度の誤差の状態を自分で観測するときには、きわめて不正確な値である。

終わりに、私は中山道旅行のさまざまな地点における地磁気偏角の観察の結果を次に示す。これはこの地方からの最初の地磁気偏角観測結果なので、興味を持たれるにちがいない。

中山道沿いの地磁気偏角観測値

観測日(1875年)	観測地	国名	偏角(西)
8月1日	大阪	摂津	5.4°
8月15~16日	草津	近江	4.5°
8月18日	柏原	近江	4.9°
8月21日	大湫	美濃	3.7°
8月27日	塩尻	信濃	4.2°
8月30日	浅間山麓	信濃	5.4°
9月1日	新町	上野	4.8°

#### 訳注

- \*1 方位を求めるための磁針と、水平角・高低角を測定できる簡単な装置を1つにした機器の総称(田島, 1983)
- \*2 2点以上の既知点から目標を視準し、視準方向が交わる点を目標の位置として定める測量方法(田島, 1983)
- \*3 原論文の付図「25万分の1中山道路線図 I~III-E. クニッピング氏自身の作製による一」を指す。

## 付録II. 中山道各宿駅間の距離<sup>1)</sup>

駅間隔	里	町	駅間隔	里	町	駅間隔	里	町
京都三条大橋—大津	3	—	馬籠—妻籠	2	—	板鼻—高崎	2	—
大津—草津	3	18	妻籠—三留野	1	18	高崎—倉賀野	1	19
草津—守山	1	18	三留野—野尻	2	18	倉賀野—新町	1	18
守山—武佐	3	18	野尻—須原	2	—	新町—本庄	2	—
武佐—愛知川	2	18	須原—上松	3	9	本庄—深谷	2	25
愛知川—高宮	2	—	上松—福島 <sup>2)</sup>	2	18	深谷—熊谷	2	27
高宮—鳥居本	1	—	(京都・福島間)	66	34	熊谷—鴻巣	4	6
鳥居本—番場	1	6				(京都・鴻巣間)	126	19
番場—醒井	1	—	福島—宮ノ越	2	18			
醒井—柏原	1	18	宮ノ越—藪原	1	18	鴻巣—桶川	1	30
柏原—今須	1	—	藪原—奈良井	1	30	桶川—上尾	—	30
今須—関ヶ原	1	—	奈良井—贄川	2	—	上尾—大宮	2	—
関ヶ原—垂井	1	18	贄川—本山	2	—	大宮—浦和	1	10
垂井—赤坂	1	12	本山—洗馬	—	30	浦和—蕨	1	14
赤坂—美江寺	2	8	洗馬—塩尻	2	—	蕨—板橋	2	8
美江寺—河渡	1	6	塩尻—下諏訪	3	—	板橋—日本橋	2	8
河渡—加納	1	18	下諏訪—和田	5	18	(京都・日本橋間)	138	11
加納—鵜沼	4	8	和田—長久保	2	—			
鵜沼—太田	2	—	長久保—芦田	1	8			
太田—伏見	2	—	芦田—望月	1	—			
伏見—御嶽	1	10	望月—八幡	1	8			
御嶽—細久手	3	—	八幡—塩名田	—	—			
細久手—大湫	2	—	塩名田—岩村田	1	27			
大湫—大井	3	18	岩村田—小田井	1	22			
大井—中津川	2	24	小田井—追分	1	6			
中津川—落合	1	—	追分—沓掛	1	12			
落合—馬籠	1	5	沓掛—軽井沢	1	3			
(京都・馬籠間)	53	7	軽井沢—坂本	3	16			
			坂本—松井田	2	—			
			松井田—安中	2	18			
			安中—板鼻	1	16			
			(京都・板鼻間)	109	32			

<sup>1)</sup> 1里 = 36町 = 2,160間 = 12,960尺 (フィート) = 3,927.27m.

従って、緯度1° = 28.28里または15マイル、1地理学的マイル = 1.886里.

<sup>2)</sup> 福島は京都と東京の中間点にある.

## 付録Ⅲ. E. クニッピング氏により中山道で測定された標高一覧表

1 字下りの地名は中山道から離れた目標物を指しており、中山道から測定され、あるいは目測された。

測定地点	標高(m)	測定地点	標高(m)	測定地点	標高(m)	測定地点	標高(m)	測定地点	標高(m)
京都, 三条大橋	42	今須	171	四ツ谷	367	寝覚(ねざめ)	743	望月	734
日ノ岡峠	88	山中	139	乱れ坂	339	駒ヶ岳	2,600	百沢(ももざわ)	758
山科	48	藤古川	128	榎ヶ根	401	上松(あげまつ)	738	御馬寄(Niyose)	706
追分	98	松尾	138	中野	296	十王沢川(Yunosawa)	764	塩名田	695
比良山(ひらさん)	900	関ヶ原	133	大井	297	板橋沢(Dondosawa)	738	下塚原	722
比叡山	825	中山	200	笠置山(Okasagi)	1,100	沓掛(Kudzukaki)	764	平塚	744
音羽山(Oyama)	420	野上	102	ニッ森山	1,700	神戸(ごうど)	767	砂田(Sunato)	753
大津	144	垂井	46	岡瀬沢	323	Yabune	1,900	岩村田	765
大萱村(おおがやむら)	96	梅山	700	茄子川(なすびがわ)	339	福島	786	平尾富士	1,150
草津	96	伊吹山	1,250	千旦林	356	上田	824	小田井	824
渋川	92	七尾山	1,000	駒場	385	小沢	853	前田原	862
守山	95	青野	27	恵那山	2,000	原野	846	大久保沢	923
行畑(Ikeamura)	90	赤坂	28	中津川	330	宮ノ越	866	追分	1,038
三上山(みかみやま)	600	池尻	15	上金(うわがね)	336	吉田	902	浅間山	2,525
大篠原	95	金生山	300	子野(この)	373	木曾川	936	浅間山血の滝	1,421
辻町	97	美江寺(みえじ)	20	落合	345	藪原	966	借宿	1,041
鏡	104	加納	20	釜沢川	343	鳥居峠	1,246	古宿	1,024
横関	94	高田	18	荒町	536	御嶽	3,000	沓掛	995
武佐(むさ)	103	新加納	26	馬籠(まごめ)	611	奈良井	995	甲山	995
長命寺山	400	更地(さらじ)	250	男埴(Okabu)	1,200	平沢	953	離山	1,200
八幡山	200	関山	400	峠村(Misaka)	732	贅川(にえかわ)	929	軽井沢	995
琵琶湖	80	金華山	250	馬籠峠(Misakatoge)	797	片平	889	碓氷峠(うすいとうげ)	1,235
老蘇(おいそ)	104	六軒	35	一石柵(いっこくどち)	719	桜沢	864	剱石(はねいし)	824
清水鼻	108	持田	220	下り谷	595	犀川	860	坂本	481
観音寺山(Kagojiyama)	500	二十軒	41	高峰山	1,200	日出塩	851	横川	420
愛知川(えちがわ)	108	愛宕山	200	妻籠(つまご)	444	本山	848	碓氷川	401
石畑	107	鶴沼	49	神戸(ごうど)	447	牧野	812	五料(ごりょう)	391
出町	105	犬山(Igiyama)	150	南木曾岳	1,600	洗馬(せば)	802	碓氷川	307
法土(ほうぜ)	106	木曾川	43	(Nakibosodake)		大門	754	松井田	300
荒神山	300	太田	63	木曾川	425	塩尻	774	郷原	277
唯称(ゆいそ)	102	今渡	69	三留野(みどの)	455	塩尻峠	1,080	八本木	250
原村	109	伏見	120	矢立山	1,350	今井	874	原市	240
原村	120	御嶽(みたけ)	128	中川原	465	諏訪湖	796	一里山	212
小野	114	井尻	142	十二兼	523	下諏訪	826	安中	176
鳥居本(とりいもと)	107	十本木峠	277	百鬼岩	1,100	春宮(Harano)	833	中宿(Nakariko)	133
霊仙(りょうぜん)	1,300	謡坂(うとうざか)	336	下在郷(Shimosaki)	518	樋橋(とよはし)	1,054	藤塚	94
Okuy またはHotokegai	1,350	津橋	252	野尻	544	西餅屋	1,345	高崎	101
摺針峠	175	Hachiman	700	Hisasawa	553	和田峠	1,646	柏沢	96
番場	139	峠	393	橋場	550	蓼科(たてしな)	2,400	倉賀野	94
番場	130	平岩	367	須原	558	東餅屋	1,549	岩鼻	85
牛打	113	細久手	405	糸瀬山	1,600	唐沢	1,108	新町	79
高山	800	北野	496	松伏	571	和田	912	石神	75
醒井(さめがい)	120	琵琶峠(Hibarutoge)	543	大沢(Kozawa)	596	下和田	840	本庄	68
一色	142	大湫(おおくて)	515	立町	623	長久保		傍示堂(ぼうじどう)	51
長沢(Nagaso)	186	炭焼(Sumiyagi)	486	木曾川	603	笠取峠	984	岡部	43
柏原	179	十三峠*	332	倉本	608	芦田	792	深谷	32
				宮戸	670	茂田井	806	東方(ひがしがた)	30
				荻原沢(Ogisawara)	654			熊谷	20
								戸田	7
								小豆沢(あずさわ)	24
								開成学校(東京)	7

訳注：該当する日本語の地名が不明のときは原文のままとし、原文と大きく異なる地名には原文を併記し、また難読地名にはひらがなを併記した。中山道沿いの地名については、五街道ウォーク・八木(2014a, b)および児玉(1986)を参考にした。

\* 大湫と大井の間に13か所もある急坂の総称(菅井, 2001)。ここではそのうちの1つ、茶屋坂あたりを指すと思われる。



## 付録Ⅳ. J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳 正誤表

区分 (年)・巻・号	ページ・段・行	誤	正
その1 (2017a), 6, 6	195, 左, 3~4	(Johannes Justus Rein : 1853-1918)	(Johannes Justus Rein : 1835-1918)
その1 (2017a), 6, 6	195, 左, 11~12	ラウエンハイム	ラウンハイム
その1 (2017a), 6, 6	195, 左, 12	1954-56年	1854-56年
その1 (2017a), 6, 6	197, 左, 下から17	小関恒雄・北村智明訳編 (1991) クニッピ ングの明治日本回想記	クニッピング (著)・小関恒雄・北村智明 (訳 編) (1991) クニッピングの明治日本回 想記
その1 (2017a), 6, 6	200, 左, 4	本報告の10巻	本報告の25巻10号
その1 (2017a), 6, 6	201, 右, 3	『廻国希観』	『廻国奇観』
その2 (2017b), 6, 9	311, 左, 原注8)	レオン・メチコフ	レオン・メチニコフ
その2 (2017b), 6, 9	311, 左, 原注8)	『日本帝国』[Metschikoff, 1878]	『日本帝国』[Metchnikoff, 1878]
その2 (2017b), 6, 9	312, 左, 21	呉 秀三譯註 (1928/29) ケンペル江戸 参府旅行	ケンペル, E. (著)・呉 秀三 (譯註) (1928/1929) ケンペル江戸参府旅行
その2 (2017b), 6, 9	312, 左, 23	Metchnikoff, L. (1878)	Metchnikoff, L. (1878)
その2 (2017b), 6, 9	312, 右, 5	<i>Ergänzungsheft</i>	<i>Ergänzungsheft</i>
その3 (2018a), 7, 3	84, 右, 訳注*3	クモミ村の所在は不明である。	クモミ村の名は岐阜市久保見町として今も 残っている。
その3 (2018a), 7, 3	85, 右, 11	<i>Ergänzungsheft</i>	<i>Ergänzungsheft</i>
その4 (2018b), 7, 5	135, 左, 下から4	<i>Hydrangea paniculeta</i>	<i>Hydrangea paniculata</i>
その4 (2018b), 7, 5	136, 右, 4~5	ヒノキ ( <i>Chamaecyparis picifera</i> )	サワラ ( <i>Chamaecyparis picifera</i> )
その4 (2018b), 7, 5	136, 右, 9	カンバ ( <i>Betula alba</i> および <i>B. corylifolia</i> )	シラカンバ ( <i>Betula alba</i> ) およびネコシデ ( <i>B. corylifolia</i> )
	136, 右, 20	<i>Vaccinium Burgeri</i>	<i>Vaccinium Bürgeri</i>
	136, 右, 下から3	<i>Schizocodon soldanelloides</i>	<i>Schizocodon soldanelloides</i>
	139, 右, 22	東京, 988p.	東京, 2088p.
その5 (2018c), 7, 8	205, 左, 2	<i>Ergänzungsheft</i> , No. 5	<i>Ergänzungsheft</i> , No. 59

YAMADA Naotoshi and YAJIMA Michiko (2019) Japanese translation of "Der Nakasendō in Japan" (Rein, 1880), Part 7— From Usui-toge to Tokyo— and its appendices.

(受付:2018年12月26日)